

川勝平太 著

『海洋連邦論—地球をガーデンアイランズに』

PHP研究所 2001年

山口 一哉

一般に高等学校で習う歴史は、「日本史」と「世界史」とに分けられ別々に教わる。大学受験においても「日本史」と「世界史」は選択科目になっており、別教科である。「日本史」の教科書の中には世界の歴史についてほとんど触れておらず、「世界史」の教科書においては西洋史の比重が高く、とってつけたように東洋史があり、日本の歴史は東洋史に入っていない。一体なぜこのようなことになっているのであろうか。

ここに紹介する『海洋連邦論—地球をガーデンアイランズに』のプロローグで川勝氏は次のように述べる。

「いわゆる「世界史」という学問分野は、近代歴史学の父ドイツのレオポルド・フォン・ランケ(1795～1886)がつくりあげたものだ。…ランケは満八十歳を前に著した自伝(林健太郎訳『ランケ自伝』岩波文庫)で明らかにしているように、彼の関心は最初の著作『ローマ的・ゲルマン的諸民族の歴史』から一貫してヨーロッパにあった。ランケ以来、世界史という学問分野は、自明のごとく、「ヨーロッパ的世界」の歴史に関心が集中した。ヨーロッパ中心史観の権化ともいべきランケ史学を、日本人は、明治時代にランケの弟子ルードヴィヒ・リースをお雇い外国人として東京帝国大学に招いて受容したのである。リースの教える世界史には日本史(国史)はまったく含まれていなかった。漢籍を扱う中国史も含まれていなかった。その欠落を埋めるために、日本史(国史)が独立した学科として立てられた。

また、その中身が中国史の東洋史(シナ史)も独立した学科として立てられたのである。世界史(西洋史)以外に、日本史、東洋史の三者が並立することになったのは、そのような経緯による。以来、日本における西洋史の専門家が中心になって「世界史」の教科書を書き、学校で学ぶ世界史の教科書が西洋史にかたよることになったのである。」(12-13頁)

このような歴史観に疑問を持つ川勝氏は新たな世界史観ともいべき地球史観を提唱する。その経緯を要約すると次のようになる。

「そもそも世界とは西洋と東洋だけでなくくれるものではない。アフリカやミクロネシア、メラネシア、ポリネシアなども世界なのである。19世紀にランケが示した「ヨーロッパ的世界」を継承する西洋史重視の世界史から脱却し、真に広い空間軸に立つ新しい全体史を構想すべきなのである。そこで、Earthという地面としての地球像からGlobeという球体としての地球像への転換を提案する。言い換えれば、西洋史中心の“世界史”の枠を超えた“地球史”の発想である。」

地球全体から見れば大陸は3割程度にすぎず、残りの7割は海である。海から見れば大陸は海

に浮かぶ大きな島でしかなく、陸地主体で語られてきた世界史の枠を超え、海から見つめる地球史の重要性を説いているのである。近代西洋文明の特徴である「力の文明」は、経済力が軍事力を支えきれなくなったことを示す冷戦構造の崩壊とともに幕を閉じつつある。このような「力の文明」に別れを告げ、多様性あふれる文明の共存と、水のあふれる美しい地球を見つめなおす「美の文明」の創造が必要なのであると川勝氏は述べる。

本書は大きく分けて3部からなる。第1部＝西太平洋津々浦々連合、第2部＝豊饒の海のガーデンアイランズ、第3部＝二十一世紀日本の構想という構成である。

第1部は主に川勝氏の海から見た歴史観、文明史観である「海洋史観」の発想に至る経緯と海洋国である日本のこれからの対外戦略を述べている。川勝氏の「海洋史観」とは、これまで陸地主体で語られてきた歴史観に対し、海に生きるアジアの重要性を説き、地球単位での歴史観を論じたものである。この海の惑星地球をイメージの中心に据えた海洋史観の始まりはブローデルの『地中海』であった。川勝氏は『地中海』で語られている多様な文化と民族が渾然となった地中海世界に触発され、東西を合わせた全体への志向を確立した。領土に分断した陸地史的発想から、異なる陸地世界を海でつなぐ全体志向をもつ海洋史的発想の転換であったと川勝氏は述べる。そして、海洋国である日本においては島と海を生かした対外戦略がふさわしく、この構想を川勝氏は「西太平洋津々浦々連合」と称し、南北を軸とした合縦、西太平洋における多様性を統一する緩やかな平和的連合を模索する。川勝氏はこのような海洋連邦を構想する理由を4つ挙げている。第1に国柄(アイデンティティ)、第2に経済的理由、第3に地政的理由、第4に外交の合縦連衝の策である。

日本は「四方を海に開いている島国」であり、輸出入の最大の相手は海に生きるアジアであり西太平洋である。東シナ海－南シナ海－東南アジアのラインを作り中国を牽制し、オホーツクの千島列島、オセアニアまで伸ばせばアメリカへの牽制となる。東西の連衝に加えて南北の合縦の道を探る新機軸が、海に生きる太平洋のリーダーとして、日本の地位と役割を明確にするのである。

第2部では副題にもある「地球ガーデンアイランズ」構想について述べている。2部の1章においては司馬文学の魅力「海洋史観」の立場から論じている。川勝氏は司馬遼太郎の外国観を次のようにまとめている。

「日本はロシアとは本質的に無縁の存在であり、中国・朝鮮からは恩恵はこうむったが両国と日本とは異質であり、西洋キリスト教世界と日本は相性がよくない。要するに、日本がロシアや中国やアメリカと結びつこうとしても、うまくいかないのは、歴史的に形成されたこの国のかたちのしからしむるところである。」(102頁)

そして、司馬史観と海洋史観はそれほど隔たるものではなく、日本の本来の姿である海に残る原風景への回帰を果たすという共通性をみいだしている。多島国である日本を「地球ガーデンアイランズ」のモデルとして考え、美しい日本ガーデンアイランズを確立させ、それを地球規模に拡大することこそ美しい地球のイメージである。そのためにも日本は人々に憧れられる美しい島国ガーデンアイランズを創造し、西太平洋に対してそのモデルを提示すべき役割を担っているものであり、21世紀における日本の立てるべき地球戦略は「美の文明」の創造であるとする。

第3部ではその「地球ガーデンアイランズ」のモデルとしての日本がどうなっていくべきなのかを文化の成熟を軸に展開している。かつて日本は中国と4度の戦争をしている。

第1回目は663年の白村江の海戦で日本は敗れ、唐の政治制度が導入されたが、天皇制や科擧の不採用、神祇官を太政官と対等に設置するなど日本独自の工夫をし、政治的に自立した。第2回目は1274・81年の元寇である。中国側が敗退し、倭寇がシナ海を荒らしまわる海洋志向が再び訪れた。1630年代まで文物は中国から一方的に流入し、経済的・文化的に中国に依存していた。第3回目は1592～98年の秀吉の朝鮮出兵である。豊臣は敗れ、徳川の時代に入り自国の寛永通宝を鑄造し、労働集約型の生産革命を起こして中国から経済的に自立した。第4回目は1894～95年の日清戦争である。敗れた中国は日本の近代化を見習おうと留学生を大量に日本へ送った。ここに来て日本は中国文化からの自立を達成したのである。第2次世界大戦後日本は経済的にアメリカから自立したが、アメリカ文化からの自立はいまだ不完全である。中国との戦いで脱中国化してきたアナロジーで言えば、経済的自立の次は文化的自立である。アメリカが憧れるような日本文化の成熟が必要な時期なのである。

そして、文化の成熟には文化力を持った人材の養成が不可欠であるとし、その根幹となる教育(特に大学)の改革を提案する。東京大学など力のある国立大学を公務員の国籍条項に縛られない私学とし、優秀な教員を世界各国から招き入れることで「学問に国境はない」とする学問の本来の姿に合致させようと言うのである。それによって世界各国から優秀な学生も集まり、日本にある日本人よる日本人のための大学から、日本にある内外の人々による世界のための大学へと脱皮することが可能となり、強いてはそれが真に頼り甲斐のある文化的エリートを育成することになると述べる。また、日本の首都移転に伴う地方分権的な日本のありかたについても川勝氏は前向きである。ただしそれは国土の均衡ある発展よりも、むしろ「地球の多様性」を指針として、地域の多様性を重んじ、各地の個性的な美しさに目を向け、各地が自立してその個性を生かした発展を目指すのがふさわしいとする発想である。

川勝氏は故小渕恵三元首相の私的懇談会「21世紀日本の構想」のメンバーの一人であったためか本書でも21世紀の日本はどうあるべきか、どう進むべきかということに対して海洋史観の観点から実に有意義な論を展開している。本書は川勝氏のマーシャル諸島での調査と経験から、日本が海洋国として、「水の惑星」の未来のモデルたりうる「太平洋文明」の一翼を担うべきことを確信し、よき未来構築のための土台としての歴史観を展開したものである。地球は豊かな水の惑星であり美しい惑星である。川勝氏は言う。「新しい21世紀の文明は、「力の文明」というよりも魅力と感動をはらむ「美の文明」になるにちがいない。その理由は、人類を生んだ地球が美しいからである。その美しさは、空の色、海の色、水の色が生んでいる。みずみずしい美の価値の重視は、原点であり全体でもある地球への回帰である。」

・追記

川勝氏の海洋史観については『文明の海洋史観』(中公叢書 1997)、日本の将来に対する国土構想については『「美の文明」をつくる—「力の文明」を超えて』(ちくま新書 2002)がある。